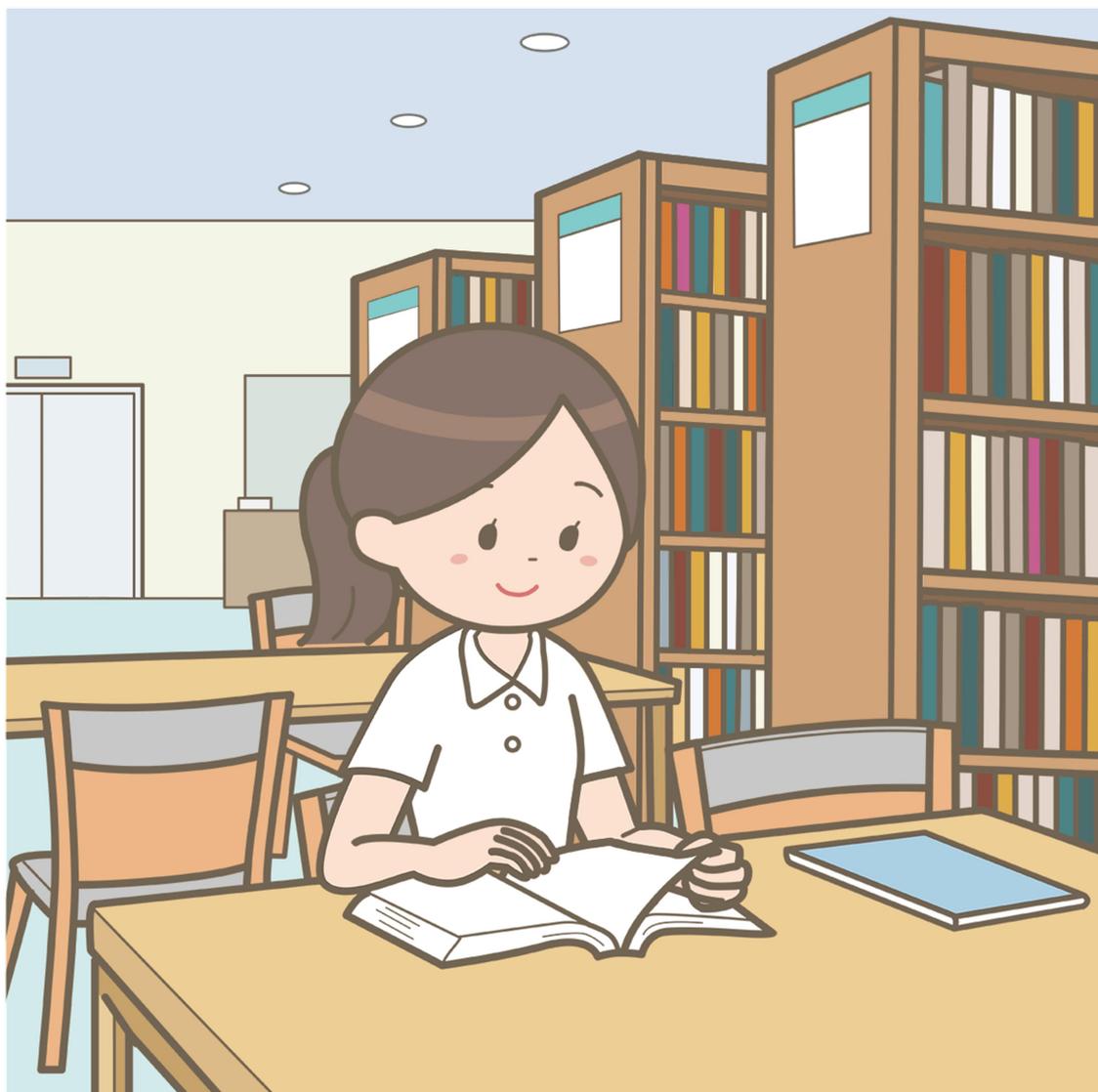


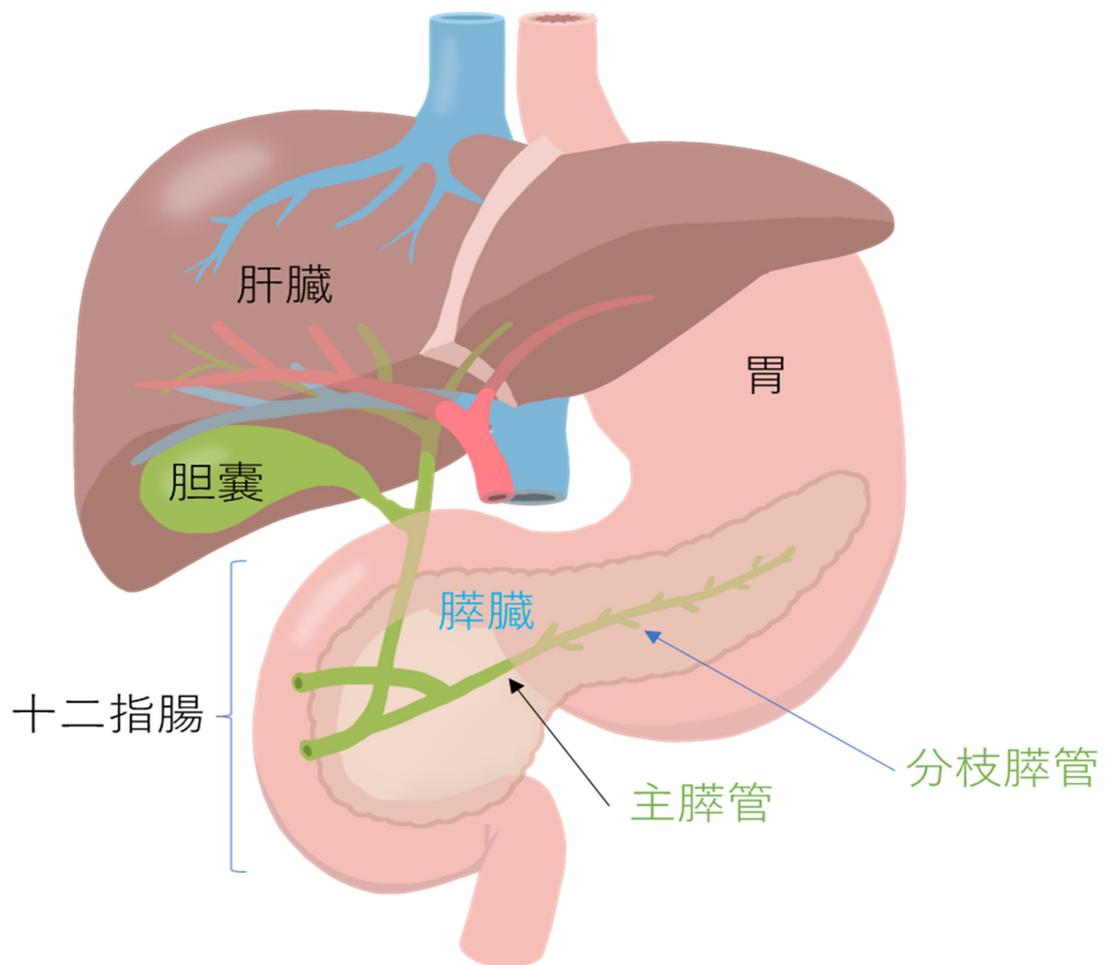
膵のう胞について知っていますか？



膵のう胞（膵嚢胞）は、水風船のような袋状のものが、膵臓の中にできたものを膵嚢胞と呼びます。症状がなく、検診などおなかの超音波検査やCT検査で偶然見つかることがほとんどです。しかし、その中には膵がんになる危険のある嚢胞があります。膵嚢胞につ

いて、少しお話させていただきます。

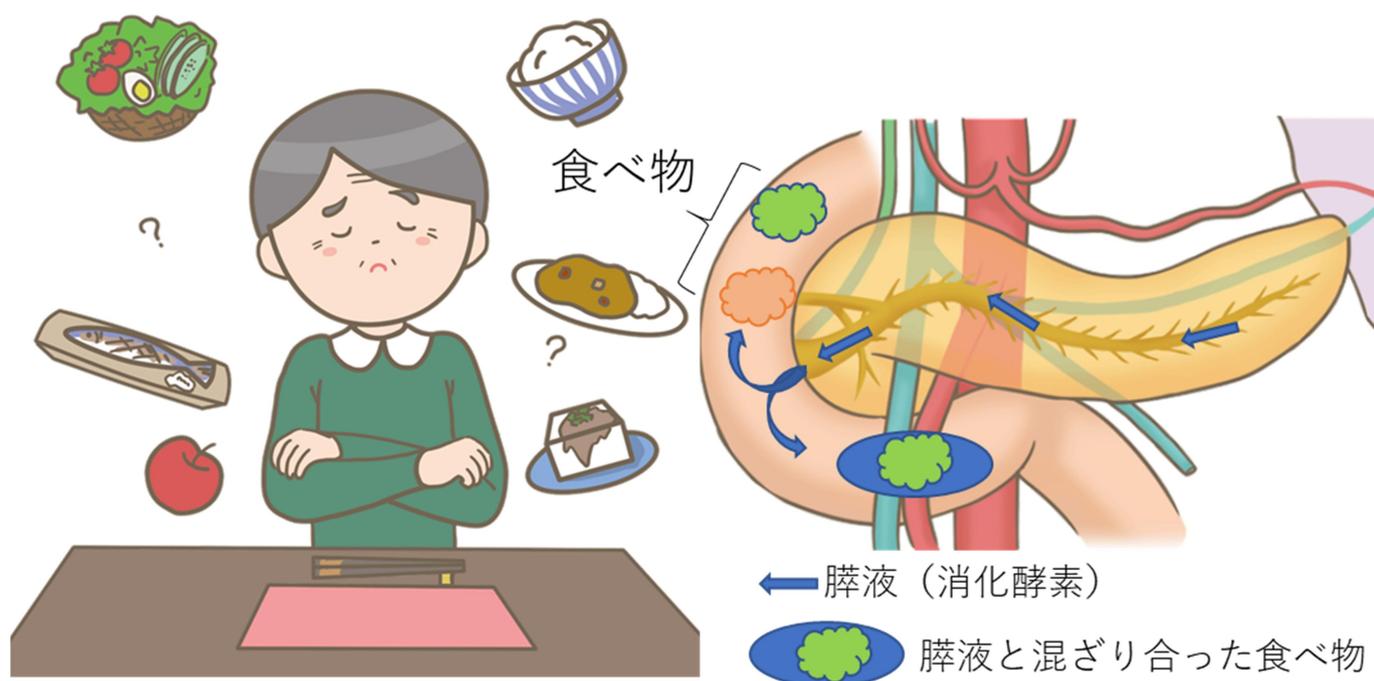
Q 1 . 膵臓はどこにあるのですか？どのような形をしているのですか？



膵臓は、心臓のあるところの窪みにあります。俗に言う＜みぞおち＞です。長さ15cm程度の右側が太く左側が細いオタマジャクシのような臓器です。膵臓の中心に主膵管と呼

ばれる 3mm 未満の細い管が走っています。  
さらに主膵管からたくさんの分枝膵管と言わ  
れる細い膵管が分岐しています。そして、膵  
臓の細胞から作られる膵液が分枝膵管から主  
膵管を通り、十二指腸に流れていきます。

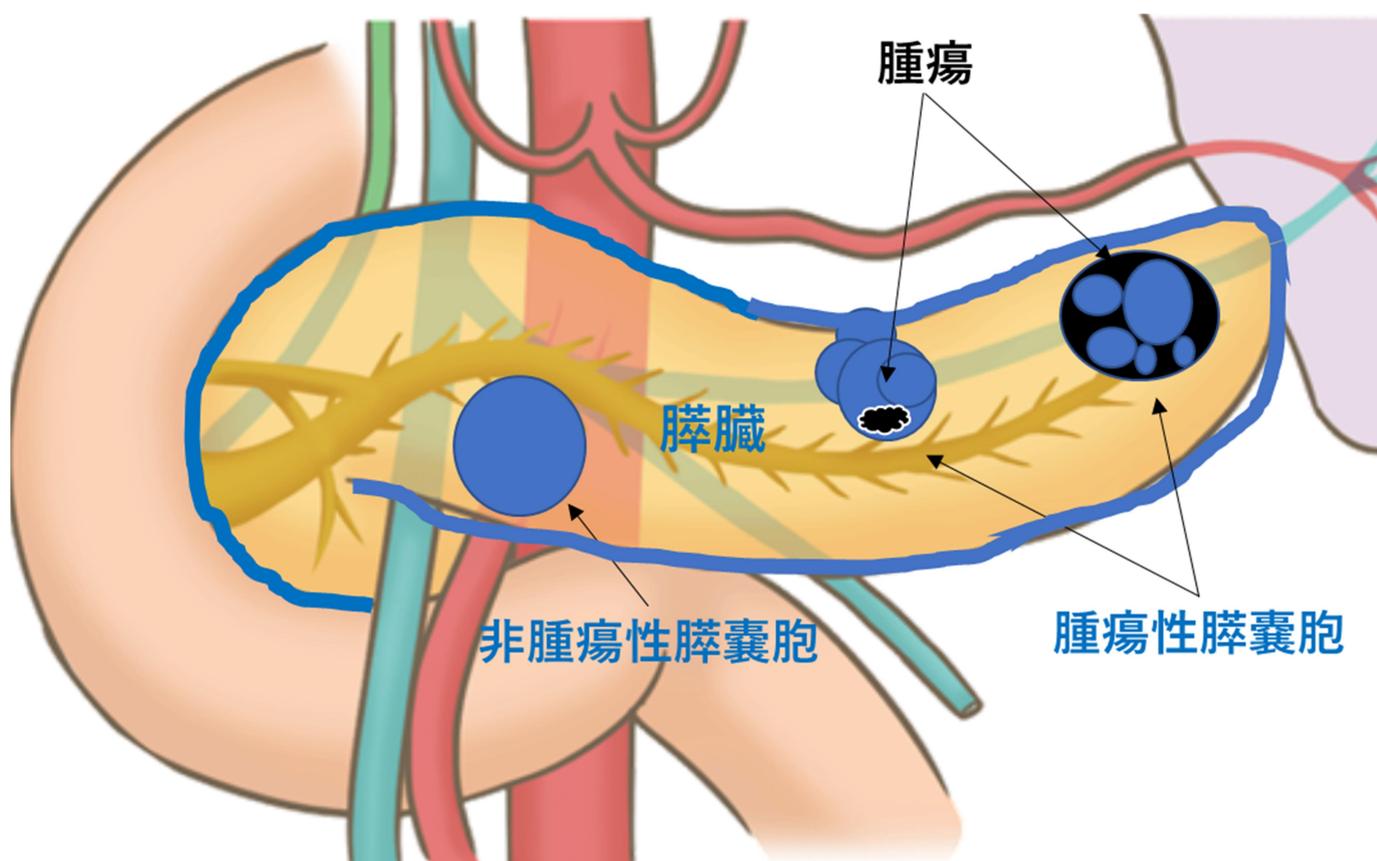
Q 2 . 膵臓はどのようなはたらきをしている  
のですか？



膵臓のはたらきは2つあります。1つは、  
膵液を十二指腸に排出します。膵液には消化  
酵素が含まれており、食べ物と混ぜり合い、

消化して吸収しやすくします。もう1つは、インスリンなどのホルモンを血液中に分泌し血糖をコントロールする働きです。

Q 3 . 膵嚢胞ってなんですか？



膵臓にできる嚢胞のことを言います。膵嚢胞にはいろいろな種類がありますが、大きく2つに分けられます。それは、腫瘍でない膵嚢胞（非腫瘍性嚢胞）と腫瘍性の膵嚢胞（腫瘍性嚢胞）です。腫瘍でない膵嚢胞は、急性膵

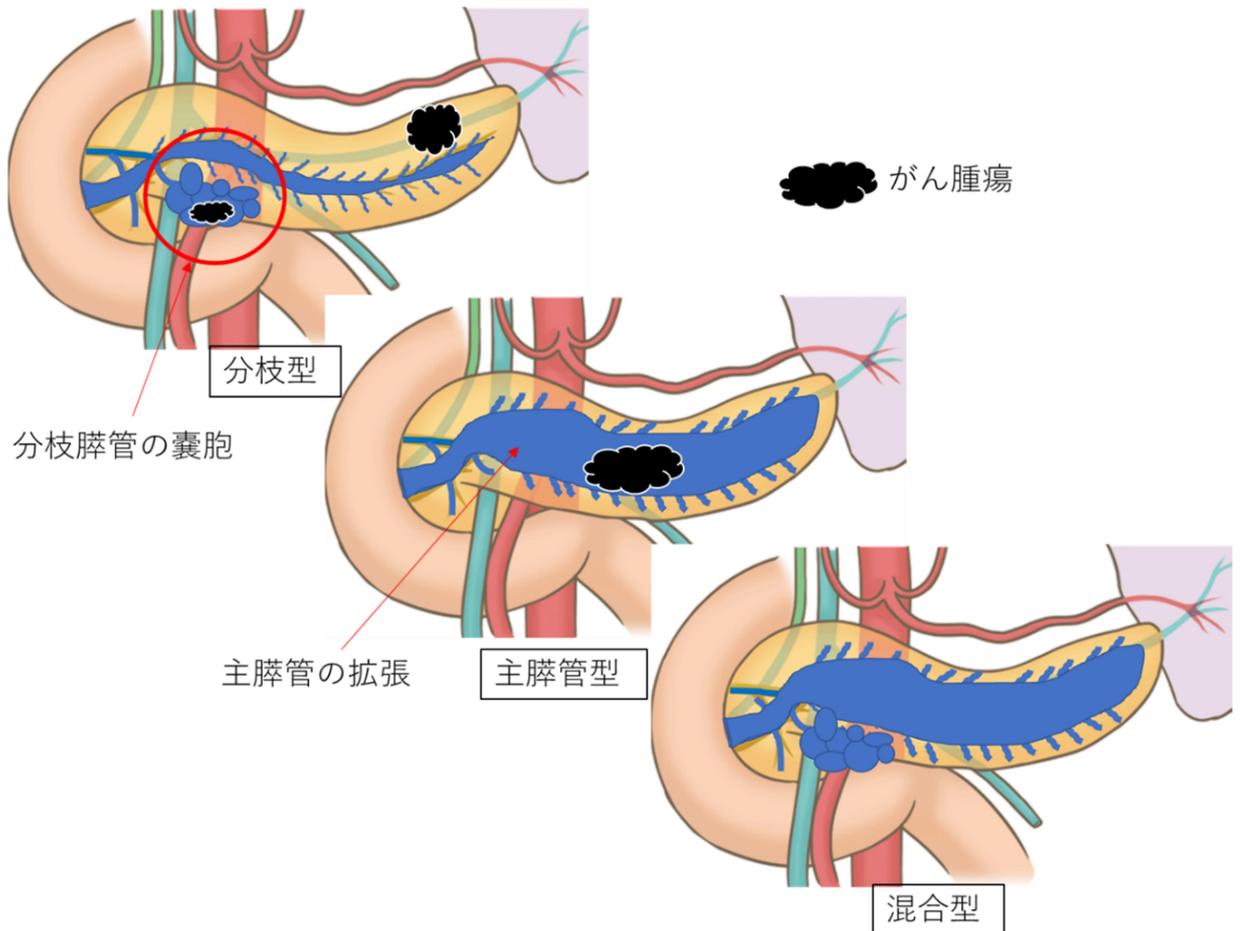
炎の後にできる仮性膵嚢胞や交通事故など外傷でできる膵嚢胞などがあります。一方、腫瘍性嚢胞の代表に膵管内乳頭粘液性腫瘍と呼ばれる病気があります。

Q 4 . 膵管内乳頭粘液性腫瘍は、どんな病気ですか？



膵管内乳頭粘液性腫瘍は、膵がんになる危険があると言われてています。

膵管内乳頭粘液性腫瘍は、膵管の分枝が嚢胞のように拡張したものです。嚢胞の内側は、腫瘍性細胞で覆われていて、粘液を作り出しています。大きく3つのタイプに分かれています。



① ブドウの房のように分枝が嚢胞のように拡張する分枝型、② 主膵管が粘液により膵液

の流れが悪くなることで、嚢胞のように太くなる主膵管型、③主膵管が太く、分枝も嚢胞状に拡張している混合型、つまり分枝型と主膵管型が組み合わさった嚢胞です。

Q5. 膵嚢胞が見つかったらどうしたら良いのですか？



嚢胞には様々な種類があります。膵管内乳頭粘液性腫瘍の場合は、膵がんになる可能性

があるので、嚢胞の種類や治療について正確な診断を行う必要があります。放置しないで、膵臓の専門の先生に相談してみてください。

Q 6 . どんな検査が必要ですか？



嚢胞の大きさや膵管の太さなどタイプを調べる必要があります。また、膵嚢胞の中や膵嚢胞の近くに膵臓がんが見つかることがあります。そのため、血液検査（腫瘍マーカー）、腹部造影CT、MRI検査（MRCP）、超音波内視鏡検査（EUS）、内視鏡的逆行性膵胆管造影検査（膵液の細胞検査）などが行われます。

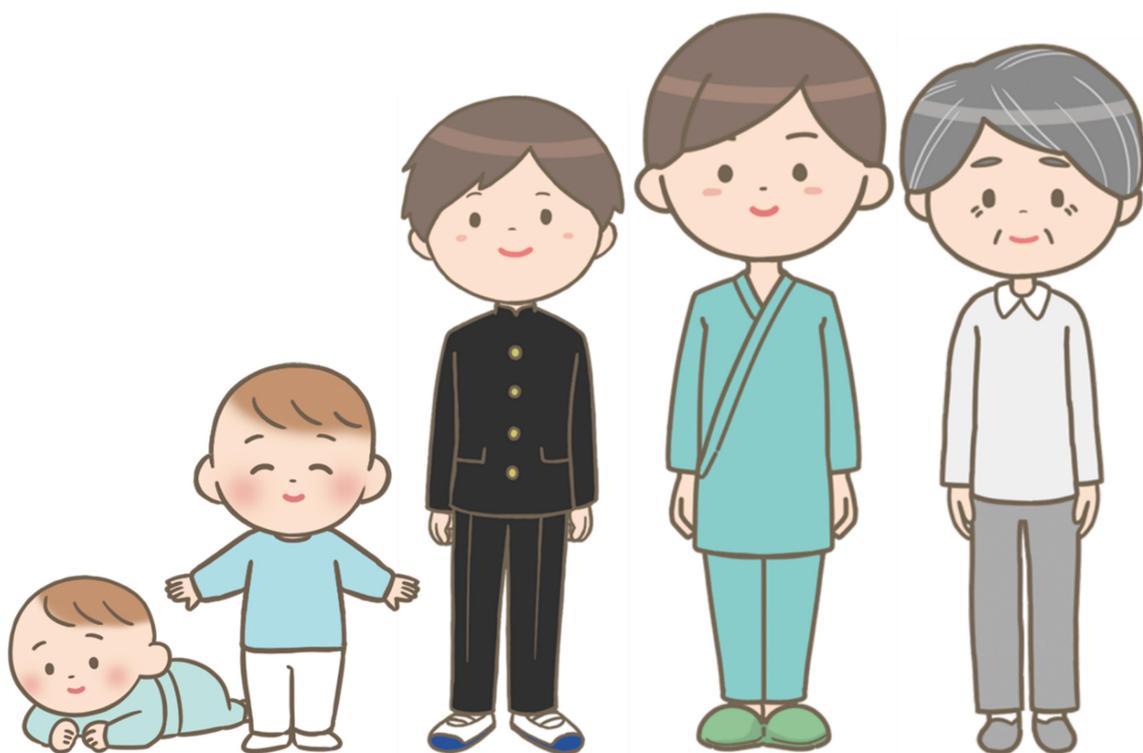
Q 7 . な ぜ 、 こ ん な に 検 査 が 多 い の で す か ？



胃がん、大腸がんでは、内視鏡検査でがんを発見できます。そして、組織を採取して、顕微鏡でがんを診断することができます。一方、膵管内乳頭粘液性腫瘍などの膵腫瘍は、内視鏡検査だけで、がんを見つけることや組織を採取して診断することが難しいのです。そのため、腫瘍マーカー、嚢胞の形や大きさ、

膵臓の血液の流れ、膵液の中に浮かんでいる細胞などいろいろな検査の情報から総合的に診断します。

Q 8 . 膵管内乳頭粘液性腫瘍が見つかりました。精密検査をしましたが、心配はないと言われました。放置してもよいですか？



人の体は年齢と共に変化していきます。膵管内乳頭粘液性腫瘍も経過と共に変化します。膵管内乳頭粘液性腫瘍の患者さんを5年間観

察した調査では 2.2～8.8%、5年間で 3.0%、  
10年で 8.8%の頻度で膵がんが発生しまし  
た。数年後に膵がんが出現する場合があるの  
で、放置しないで経過観察する必要があります。

Q 9 . どのように経過観察するのですか？



経過観察期間は、嚢胞の大きさなどを参考に目安が定められています。3 cm よりも大きければ3か月、1～2 cm は6か月、2-3 cm は1年、1 cm 未満は2年毎です。検査方法も、大きさなどによりCT、MRI、超音波内視鏡検査（EUS）を組み合わせ検査を行います。日々の健康管理と共に定期的な検査を受けましょう。

文責：藤田医科大学ばんだね病院

消化器内科 三好広尚